仮面ライダー×学園黙示録～仮面ライダーとひとつの世界～

仮面ライダー死鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダー×学園黙示録～仮面ライダーとひとつの世界～

【Ｎコード】
Ｎ０７８０Ｖ

【作者名】
仮面ライダー死鬼

【あらすじ】
主人公　黒鬼　龍はある神に殺され死に、もともとあってはならなかった悪の軍団を倒すこととなる。そして見事その組織を倒せたら元の世界に帰れるとゆう　そして主人公は、悪の軍団の改造人間として生まれ直してしまう。　そう仮面ライダーに変身する力をもって

第1話　白き世界と小さなおやじ（前書き）

初めて書いた作品で誤字が多いかもしれませんが温かい目で見てください
もう3・４話したら学園黙示録の意味分かります、オリキャラが出ますがどうぞお楽しみによろしくお願いします

第1話　白き世界と小さなおやじ

「オレ・・・どうしたんだ・・・」
辺りには白い世界しかない
「死んだのか」・・・・とっさにそう思った
「おい起んか！！」　「え？」誰だ　こんなとこで
起き上がってみてみたら小さいおじさんがいた　かなり小さい
オレはあ然としていた　白い世界でおじさんと二人っきり無理もない
「単刀直入にゆう、お前は、死んだ」　「はい、分かっています」
小さいおじさんはちょっとこけそうになった「まったく、このことをゆって驚かなかったのは、お　まえともう一人しかいないぞ」とオレに聞こえるか聞こえないかの声で文句をゆっている。
「え、何かいいました」俺は聞くと　「いやなんでもない」といった
「さて話を元に戻そう、お前は死んださっきも行ったとうり」　「はい」
「そこでだ、お前に頼みたいことがある悪の軍団を滅ぼしてくれんか。」
「な、なに〜〜ぃ」　俺は、意味が分からなくただ叫んだ.

第1話　白き世界と小さなおやじ（後書き）

次回　第2話　死んだわけと仕方がない

死んだ理由と仕方がない

「こら騒ぐな」　「す、すまねー」

「おおそうだったお前の記憶は、ほとんど消さしてもらったからなたぶん自分の　　名前も思いだせんだろう」

「何、・・・本当だなぜだ！なぜそうした」

「落ち着け転生とゆうのはそうゆうもので記憶は自動的に消える」

「まあ、話を戻すぞ」「あ、ああ」

「お前さんがいた世界と同じ世界が何百もあるのおしっているか」「ああ、パラレワールドってゆうやつだろ」　「まあそんな感じだ、そしてひとつの世界に仮面ライダー達が世界を守る世界があった」　「な、なんだと」　「だから落ち着け、そしてその世界でいてはいけない悪の組織が生まれた」「いてはいけない？」

「ああ、そしてその組織にライダー達は負けその世界は征服された　しかしそれだけな　　らよかったがあいつら転送装置とか何とかを造り他の世界をも征服していった」

俺はただうなづくしか出来なかった

「わしも努力はしたお前見たいのを呼び集め世界を救ってくれと頼んだ」

「しかし組織に殺されたり、指名を放棄するものが現れただから頼む世界を救ってくれ頼む」

俺は正直迷った　自分か世界を救うなどヒーロー的なことは出来ないと思った

でも、

「やってやる、やってやる！」　「オレが世界を救う」

ある所のある実験室

「成功か」「ああ、ライダーどもの力をこの子に送ったこの子は立派な兵器になった問題ない」　「試作型は必要ないか」
「ああ必要ない」

「そうかよくやった、わが子よお前にはこれから立派な仕事をしてもらうよ」

そしてその二人の後ろには、この子の《親》と呼ばれる男が立っていた

死んだ理由と仕方がない（後書き）

次回　自分の使命と転生した場所

自分の使命と転生した場所

「本当にいいのか」　「何度も聞くなめんどくさい」俺は軽くあしらった

「分かった転生をさせよう」　「おう、何でも来い」　覚悟は決めた問題ない

「向こうにいったら君がどんなになるか分からんだがこれだけは、いえる。君は絶対組織の敵であると」　「わかった」

「よし始めるぞ」　「おう！」

その後オレは光に包まれ下に落ちていった・・・

・

「・・・お・・・目覚め・・」　声が聞こえるどこだここ・・・

きづくと俺は緑の液体の中、白衣を着た科学者らしきやつらにみられていたすると急に苦しくなった　科学者が何かいっている

「おいなんだ！」　「やはり乳児にライダーのエネルギーには耐えられません」

「仕方ないあれをやるぞ」　「しかし、」　「この子を殺したら私達が殺されるんだぞ」

「・・・分かりました」　「よし今からこの子の機能してな

い部分の改造を行う」

「了解」　「・・・了解」　俺の意識が遠のいた・・・・・

どれくらい眠っただろう時々自分が死んだのかと思う・・・・

すると目の前に人が見える。誰だ・・・・・

黒い装束、黒い鎧を持った男が立っている

「おお、わが息子やっと起きたかあれから3年たつな、死んだと思ったぞ」

何、オレは3年も寝てたのかでも　何だ、体が異様に大きいぞ

「おお、びっくりしているなわが子よ機能してないところを改造したら乳児の体では負担がありすぎる。そこで私は、わが子の体をちょっと時を早めた何、仮面ライダーカブト　ハイパーの力があれば簡単なことだ、お前はもう体の６０％は改造されたつまりお前はもう人間じゃない」

男は、ニコニコ笑いながらしゃべった

俺は「ふざけんな！」と言おうとしたが急に頭の中に何かが入ってきた」

な、何だこれは、歴史、戦術、銃剣術やライダーについてことが頭に入ってくる

俺が苦しそうなそぶりお見せると　男は、またうれしそうに言う

「わが子の中に、データを送ったすべてのデータを、体術、古代文字、作戦術などすべてを！！」

その時何が起こったがわからないが自分が入ってたガラスが割れた、
「な、何だ　何が起こった」　男はあせっていた
俺は無我夢中で逃げた通路を右、左とわたってすると「こっちだ、早く」
白衣のやつに腕をつかまれオレはある部屋に入った
そこはオレのいた部屋の2倍のでかさだった　そしてそれに負けないぐらい大きな機械があった
「君は逃げろ、これを使って早く」　男は、機械をいじりながら言う
「これは次元転送装置これを誤作動させれば別の世界で暮らせるさあ、早く」
男はそう言うとオレを突き飛ばした
「生きろ・・・」そう聞こえた
オレは空から落ちているのは分かったそしてどこか庭みたい場所に落ち眠った

自分の使命と転生した場所（後書き）

次回　龍の名前と親の愛

龍の名前と親の愛

まぶしい・・・どこだここ、そういえば「おっさん！！」俺は叫んだ、

見ると女の人がコクコクと寝ている叫んでも起きなかったのはすごいくらいだ、

すると一人のおじいさんが部屋にはいってきた「起きられましたか、よかった」

オレが軽くお辞儀をするとおじいさんもお辞儀をした

「奥様、奥様　起きましたよ、起きてください」　「ファーーー」

能天気そうにあくびおした顔が急に笑顔になった　「まぁよかった、怪我、してない」

「いきなりびっくりしたわ、空から落ちてくるなんて」　オレは状況を理解できなかった　「奥様、この方状況をまったく把握しておりませんぞ」

「あら、そうね　私は、この黒鬼神会会長の妻の黒鬼　アキよ　で、こちらが執事」

「串野です。」　執事の串野さんは、またお辞儀をした。

「そして、あら、あなたーーどこーー」すると　ドンとドアが開きでかい男の人が入ってきた「おお、無事だったか、心配したのだぞ」　「私の名前は黒鬼　零次この黒鬼神会の会長をやっている」　このひと一言一言が怖い、「だめじゃないですか、あなたこんな子供にドアをドン！！だなんて」　「いやはや、本当に申し訳ない、ん、少し動揺しているかそういえば君の名前は、」

「俺の名前・・・」　そういやーまだだったーーー

「えっと、その、り・・龍です」　「龍と言うのか」　「いい

名前ね」　「で君はなぜ空から落ちてきたのだ」　「えっと信じてくれないかもしれませんけど」

オレは全部この人たちに話した

最初は冗談で聞いていたけどだんだん真剣な顔になっていくのが分った

「分かった信じよう」最後には、そういってくれた

「あなた・・・」　「この子の目にうそはない、しかしその話が事実だと家はないだろう」　「はい、たしかに」　「なら私達の養子にならない」　「はい？」

「うむ、そうしよう」「今から頼めば明日にはできるだろう」

「うそだろ。」

龍の名前と親の愛（後書き）

次回　養子とバトル　お楽しみに～

ちょっとタイトルの名前まちがえましたごめんなさい

養子とバトル

次の日・・・　本当に全部出来ていた正直うそだと思ったが、でもこの人たちのことは、大体分かった

黒鬼神会とゆうのは、有名な右翼で黒鬼　零次はそこの大将そしてここの大きな庭には、１００人近い人が戦闘の訓練を受けている

「やってみるか。」　そういったのは、黒鬼　零次　今では、オレの父親にあたる人

「はい！」　オレは答えた

最初は、アキさんも駄目だといったけどしぶしぶゆるしてくれた。

庭にいた人たちは、オレを知っていたのかお辞儀をしてくれた。

「いくぞ！」　「はい」

その時、ピィーンと頭の中に何かが走る・・　「ぎゃーー！！」　「な、何だあの化けもんは、！！」と悲鳴が聞こえた

庭の外の道路にファンガイアが人間のライフエナジーを吸収していた。

「全員守りを固めろ、」と零次さんがいった

俺はとっさにわかったこれは、仮面ライダーアギトの敵を知る感知能力だと

俺は庭を出て新しい人間を襲おうとしたファンガイアに蹴りを入れた

「ギャ！」　と叫び転がるファンガイア
「何でお前みたいなやつがここにいるんだよ」　「私はこの世界の偵察部隊の怪人、まさかあなた様がここにいるなんて驚きです。」　「あ、なんでだ」
「お父上様がお待ちです。私が保護しましょう」ファンガイアが近づく

「ふざけんな！」　オレはふたたび蹴りを入れた
「ガッ！　な、なぜです」　「オレは、世界を守るそう約束したからな」
「なら、力ずくでも」　ファンガイアがオレに襲い掛かったきた

「へっ、なら実力の差をはっきりしてやる」　「変身！！」
出来たと思った・・　でもできなかった・・
オレはファンガイアのパンチをまともに受け倒れた　「がっ、」
「　変身できてないですね、だがそっちのほうが好都合　さあ一緒に来てください」
ファンガイアが俺を連れて行こうとした　その時・・・

俺の体が突然ひかりだした
「な、何　どうしたとゆうのですか」
ひかりは３秒ほどで消え俺の腰には、クウガのアークルがあった
「ライダーがオレに答えたんだよ、お前を倒せってな！！」
「変身！」

オレはそういって変身のポーズをとり仮面ライダークウガ　マイティフォームに変身した
「なぜだ、なぜだなぜだなぜだーーーー！！」　そういいながら襲い掛かってきた
今なら勝てるこいつにそう思った
襲い掛かってくるファンガイアにオレはパンチをおみまいした
「ガッ！！」　「さっきのおかいしだ！まだまだいくぜ！！」
そういってパンチの連打を浴びせる　「ガッ、グ八ッ　」
「とどめだ」　オレは、マイティキック　くらわした
「ぎゃーーーーーーー！！」　ファンガイアは遠くまで飛ばされ倒れた
終わったオレは変身をといて家のほうに帰ろうとしたその時・・・
「まだ、まだ終わりませんよ」　さっき倒したはずのファンガイアがぼろぼろになりながら立っていた。
そしてオレにこんしんザンゲキをくわえオレは飛ばされた
「私はまだ・・・ぐ、グおおおーーーーー！！」
そういって爆発した、

気がついて起きてみるとアキさんと零次さんが心配そうに俺を見ていた
「大丈夫？龍」　「心配したのだぞ、龍」
よく見るとオレの体は右斜めに包帯で巻かれていた
「こ、これは、」　「後、残っちゃたのよ」　「心配ない内部までは届いていない」　「あ、ありがとうございます」

オレはちいさい声で父さん、母さんと言った

「さて、その傷なら来週には学校に行けるな」　「は、はい？」

「そうね、この近くなら藤見学園ね」　「え、何で？」

「だーかーら、来週からあなたは、高校1年生なのよ。ちょっと入学式には、遅れたけど、大丈夫よあなたなら」

オレは、この人たちの行動力にただ驚くばかりであった

養子とバトル（後書き）

次回　転校と仮面の敵

転校と仮面の敵

「おお、わが息子はいったいどこに」　「落ち着いてください、総帥」

「ばかもの、息子が行方不明なのだぞ落ち着いてられるか、！！」

「それよりも、先ほど偵察怪人のファンガイアの一体がやられ生命反応が消えました」　「そんなことは、どうでもよい　ああ、はやく息子を、息子を、」

？？？1「どうでもよくわねーだろ、総帥」

？？？2「そうだぜ、なさけねーな　たくよー」

「こらお前達、総帥に油を注ぐな、お前達、その世界にいってファンガイアの変わりに偵察とファンガイアを殺したものの抹殺をして来い、いいな」

？？？1「ふん、転送装置がないのにか」

「ばかを言うな、お前達は、自分達の力だけで世界に移動できるだろうが」

？？？2「ちっ、ばれてたか」

「さあ、はやくいってこい」　？？？1「はいはい」？？？2「ちっ、めんどうだな～」

そのころ、

オレはこの一週間自分の体のこととライダーの力つまり変身のしかたを徹底的に調べた　まあ、親父がやったあの頭の痛いやつのおかげで体の機械の部分の把握とライダーの力のことについての事を大体理解した。

そして今オレは、藤見学園の1年A組の教卓の前で挨拶をして

います

「転校してきた、黒鬼　龍です。よろしくお願いします。」

そういうと、あたりから歓迎の拍手がなっていた。

「さて、君の机だが毒島君の隣、一番後ろの席だな、」

オレは、自分の席ですわりその毒島さんに挨拶した。

「よろしく」　「ああ、こちらこそよろしく頼む」

授業は、平凡とゆうか、頭の痛いやつで寝てても分かるぐらいの問題ばかりだった

先生が転校生の実力を試そうとしているのかあたるにあたるまあ、簡単なんで、ことごとく答えているけど、

???1「ここに、あるか・・・」

???2「オレもここにあるな・・・早く探さないと」

「えっ、なにこれ、」　「おいおい何か浮いてるぞ」

???1「見つけた」　???2「オレもだ」

「ぎゃーーーーー!!」

昼休み

2年の田中と佐藤とゆう生徒が呼び出しをくらっているのに、なかなかこないのか、毎回呼び出す先生の声がだんだん怖くなる

「いったいどうしたものか、」　「ぶ、毒島さん、ち、近い」

「ああ、すまない、先生に昼休みに学校の案内をしてやれと言われたのでな」

「では、いくぞ」　「えっ　ちょと、まっ」　半ば強引に引っ張られた

「ここが、保健室であっちが特別教頭だ」

「へぇー意外と広いな」　と言ったその時、

「がっ、く、はぁ」　「ど、どうしたのだ黒鬼くん」
この感じあのときのでももっとひどい
「いったいどうしたのだ」　「に、逃げろ」　「え？」

その時、　バリーーン　ドガーーーンと3階が爆発した
「え？、な、何が起こったのだ」　「ここから逃げとけよ。」
「ど、どこに行く」

？？？1「ひゃはーーやっぱり暴れるのは最高だな！！」
？？？2「この体気に入った」
見ると二人の男子生徒が暴れたいた。
「なっなんなんだよ」
？？？1「あ？何でここにいるんだよ。」
？？？2「へーここで会うんだ」
「何が言いたい」　？？？1「あんたの親父がおろおろしていたんでな」
？？？1「いくぞ」　？？？2「了解」
？？？1「変身」　？？？2「変身」
1の方は、仮面ライダーリュウガに2の方は仮面ライダーオーガに変身した。

「な、何で仮面ライダーがここに、」
リュウガ「オレたちの世界が支配されもともと悪だった俺達は、じきじきにスカウトされたんだよ」　オーガ「そうゆうこと」
そういうと二体は、オレに襲い掛かってきた。

転校と仮面の敵（後書き）

次回　屋上とばれた

屋上とばれた（前書き）

みにくいと意見がよせられました。申し訳ございません。
しかし、初めての小説なので、　見やすい書き方がよくわからないので、
アドバイスのほうを載せてくれたらいいと思います。
本当に申し訳ありませんでした。
今回も見えにくいと思いますが、アドバイスがいただければ、それをいかしてこんごこの小説を変えたいと思います。

屋上とばれた

龍「なぜ俺を襲う、つれて帰るんじゃないのかよ」
　オレはそういいながら、リュウガとオーガの攻撃をよけている。

　リュウガ「お前がここにいて、偵察のファンガイアがやられたとなれば大体想像がつく、それに、転送装置がこわれているんでね、気絶でもさして、どっかで監禁でもするか。」
　龍「ったく、めんどくせーな、おい　」
　オレはそう言うとバックルを取り出し、その後、腰にベルトが出てきた。
「変身」　　そう言うと俺は、仮面ライダー龍騎に変身した。

オーガ「へぇ〜〜、変身するんだ、とゆうことは、俺達に逆らうと」
　龍「ああ、逆らうさ」
　そう言うと俺は、二人に立ち向かった。

　が、
　龍「いって〜〜な、さすがに龍騎とリュウガじゃ歯が立たないか」
　リュウガ「ふん、お前にあいつみたいに龍騎が使えるか」

　そうオレは、龍騎で戦いリュウガに圧倒的強さで負けたのだ、
　龍「言ってくれるじゃねーか（でも、やつに龍騎で戦うのは無理か、それにここでは、建物の被害が大きいか）」
　　そしてオレは、変身をとき、階段を上がった、
　リュウガ「おうぞ。」　　オーガ「はいはい」

ここは屋上、よかったことに、人はいなく、みんな避難したみたいだ。
オーガ「鬼ごっこは終わりかい？」
リュウガ「はむかったんだ、ここで殺す。」
龍「は、ここなら十分暴れられるからな、ここに来たんだよ。」
オレはそういいながら、
腰にベルトを出し、変身のポーズをとり、「変身」ゴオオオーと言う音とともにオレは、仮面ライダーアギト　グランドフォームに変身した。

リュウガ「まだ、命が惜しいか」
オーガ「ここは、俺がやる、リュウガは手を出さないで」
そう言うとオーガは、オレに襲い掛かってきた。

剣でかかってくるオーガに拳で対抗するには、限度があった
龍「いって〜〜、卑怯だぞ」
オーガ「卑怯？そんな言葉知らないよっ」　龍「がっ！」

龍「な、なら」　オレはベルトの左部分を押しアギト　フレイムファームに変身した

剣対剣は、勝てると思ったが向こうの方が強く力で押し負けグランドフォームに戻った。
龍「セイバーがだめならハルバードだ」
ベルトの右部分を押し俺は、アギト　ストームフォームに変身した。
オーガ「こりないね、君」　龍「悪いな、これで終わらす、」

ハルバードのリーチがあってか、オレはオーガを押していた。
オーガ「がっ、くそ　ぐわっ！！」
龍「ずいぶんと手間かけさしたがこれで終わりだ」
オレはグランドフォームに戻り、クロスホーンが展開した。

オーガ「リュ、リュウガ・・た、助けて」
龍「もう遅い」そう言うと同時にオレは、ジャンプしライダーキックを決めた。

オーガ「ぎゃぁぁーーーーー！！」
見るとこの学園の生徒が倒れていた。
リュウガ「ちっ、オーガのやろうどじ踏みやがって、仕方がないオレも人間も帰そう」　そう言うとリュウガのバックルが鏡のなかに現れ一人の生徒が倒れた。

リュウガ「お前は、親父に逆らったこれでもうお前は、オレたちの敵だ！！わかったな。」
リュウガのバックルは、鏡の中に消えた。

龍「さて、この二人はどうするかな、」
よく見るとこの二人は、あの先生に呼びだしを食らっていた二人だった。
いまは、気持ちよさそうに寝ている。

ガコン　と何かが落ちる音がした。
龍「誰だ、！！」　毒島「わ、私だ、黒鬼君」
龍「えっまさか」　毒島「ああ、全部見てしまったよ」

マジですか・・・

屋上とばれた（後書き）

次回　訓練と転校生

意見とアドバイスのほうよろしくお願いします。

訓練と転校生

オレは、毒島をにらみ言った。
龍「このことは絶対に誰にもゆうんじゃねー、分かったか。」
オレは、言い返す暇も与えず階段を下りた。

3階の爆破と、屋上の火事（オーガをやっけて燃えたところ）は、新聞で3階の家庭科室のガスの爆破とタバコの小火が原因と判断され事件は終わった。

あのことの次の日、
はっきり言って学校には行きたくなかった、毒島には、あんなことを言ったからな。
毒島「おはよう、黒鬼君」　龍「え、あ、おはよう」
「少し付き合ってくれんか」　「え？」　俺は言い返す暇もなくついていった。

毒島「ここは、武道場で朝は誰もいない」　龍「ここで何をしろと。」
そういったその時、毒島が竹刀を投げてきた。
龍「お、竹刀？」　毒島がふっと笑っていった
毒島「君は運動能力は悪くない。ただ、頭で分かっているのに体が動かない感じがしているな、だからわたしが稽古を付けてあげようと思って」
龍「何だそんなことか、」　オレは、上着を脱ぎ毒島が構える前に立つ。
「オレが稽古を付けてやる」　毒島「ふっ、こい！！」
結果は惨敗、おまけに体が少しいかれた、機械だぞこっちは、ま

っ自分で治せるんだが今はいいだろう。　先生「えーみんな今日またこのクラスに、転校生が来ました。本当は他のクラスがいいんだが、黒鬼君と知り合いなのでこのクラスになった」
龍（なに、オレの知り合いだと）そう思ったら毒島が俺に話してきた。
毒島「君の友達か？」　龍「ちがう、ちがう、ちがう。」
先生「入ってきてくれ」そう言うと優しそうな男子が入ってきた。

先生「では自己紹介を」　高田「高田大師（たかだ だいし）ですよろしく。」
ところどころで女子の声が聞こえる。
先生「では、佐々木さんの隣に、」　高田「はい」
高田が席に座ると隣の佐々木さんが顔を真っ赤にしている。
高田「よろしく」　その笑顔に女子がきゃーーーと言った。

1時間目　何と転校生の高田が授業をサボったのだこのことには、先生も驚きでオレに探してこいと言った
龍「たく、知り合いってふざけたことあいつが言ったから俺がこんな目に」
オレは、まどの外を見た
龍「ん、あれは、高田」　見ると、屋上には、高田が何かしていたのだ、

オレは屋上に上がって高田に言った
龍「おい、何やってる早く来い！」　高田「はい、すみません」
龍「おい、お前なんでオレの知り合いって言ったんだ」
高田「いや、後輩がどんなやつかみたくて」　龍「は？どうゆう意味だ」
「いいや、なんでもない　さ、早く行こう。」

そう言うと高田は、階段を下りた

訓練と転校生（後書き）

次回　計画と別れ

計画と別れ（前書き）

アドバイスありがとうございます。
今から頑張りたいと思います。

計画と別れ

高田は本当に変な奴だ、授業は、ろくに来ないし。いないと思ったら、いきなり授業に来るしおれは先生によく聞かれるんだが、俺は知らないの一点ばりだ、本当に知らないんだもん。

さて、今は、夏休みの真っ最中であり、毒島と俺の家で特訓をしている。毒島の父さんと零次さんが知り合いなので毒島が俺の家で寝泊まりし特訓をしてくれている。俺はこの時間この世界で初めて笑ったような気がする・・・

とある所

ここは、世界を破壊し征服している俺の本当のオヤジがいる戦艦

鏡からリュウガが帰ってきた　「おお、リュウガ帰ってきたか」こういったのが俺のオヤジこの世界の悪であり親バカである。

「ん、オーガはどうした。」

「やられた、全く情けない」その一言で、辺りが静まり返った。

だがその沈黙を破ったのがオヤジである。「ほぉ、で、誰にやられたんだ。」オーガがやられたことよりもその倒した相手に興味を持つオヤジ、「倒したのは、お前のガキである、1号だ。」

「へ～～～、情けないなオーガも落ちたね。」

「まったくです、敵を甘く見ていましてね。」

リュウガの後ろの二人が言う、　「で？どうするんだ、お前のガキは、向こうの世界で悠々と暮らしているぞ」　「ふ～、仕方がない、その世界の人間を殺したらわが子も帰ってくるだろう。」

「今すぐその世界のわが子にふざけた教育した人間を殺せと偵察に

言ってこい。」　「了ーー解」後ろの一人が言った。

カン、バンなど音がする、ここは、俺の家の道場、今は夜中で、竹刀がぶつかる音が　よく響く、

「ここまでにしよう」　「おう！」　毒島が来てもう1週間がたつ、迷惑とゆうか、何とゆうか、「どうしたのだ？」毒島が顔を覗き込んだ、　「おわっ、ぶ、毒島近い、」

「ふっ、いい加減冴子と呼んでもらいたいな、」　「なっ、その話は終わったと言っただろ」　そう、毒島は最近、冴子と呼べと言う。俺は当然毒島と言っているがな、「そ、それより早く帰ろう、雨も降ってきそうだし」「ああ、そうだな」

「・・・なぁ、龍、お前に話があるんだが。」　「あ？なんだよ、ぐ、は、またか」またアギトの感知能力か、いったいどこにいる。すると、家からガラスが割れる音がした。

「なにごとだ、いったい」　俺はその言葉を聴く間もなく家に向かった、（今のは、アキさんと零次さんの寝室）俺は急いで寝室に向かった。

開けて見てみると、二人はベットにいる。でも、もう二人割れたほうの窓にいる。

「ワームか、でも何でここに、二人に何をした！！」　アキさんのほうが口を開く「私たちのリーダーがこいつらを殺せと命令が出でね、でもあなたがこの人たちの養子になるなんて、あなたの父上がなくわよ。」　零次さんも言った「さぁ、いっしょに行こうじゃないか、」　「ふ、ふざけんな、」俺はそう言い二人を窓から突き落とした。

不意打ちとはいえ、さすがワーム二人とも足で着地した。「やは

りだめか、」「そうね」そう言って二人はワームの姿に戻った二人とも羽化していた。
「俺は、あんたたちを許さない、絶対！！」俺は腕を上げカブトゼクターを呼んだ。「変身」≪ＨＥＮＳＨＩＮ≫俺は、仮面ライダーカブトマスクドフォームに変身した、二体が襲いかかってきた、俺は、戦おうとしたがパンチが当たりそうなとこで腕が止まってしまう。（なぜ、俺は、）　女性型のワームがパンチを与えながら言った「やはり、攻撃できないみたいですね。」「一気に終わらす」二人は、クロックアップし、俺に攻撃を当てる。「がっ、ぐはっ、」（体が動かない・・・俺はもう・・・）　「ば！！か！！」大きな声で叫んだのは、毒島だった、「今君が戦わないでご両親が喜ぶと思うか！！」
「さ、冴子」　「やっと名前で呼んでくれたな」　そうだこいつは、偽物俺は何考えてたんだ、俺は、ゼクターの角を上げた「キャストオフ≪ＣＡＳＴ　ＯＦＦ≫カブトライダーフォームになった。それを見た二体は、「やめて、龍」「そうだぞ、龍母さんのゆうとうりだ、」　「アキさんと零次さんの・・・母さんと父さんの声でそんなことゆうなーー！！」　二体はまたクロックアップした。「もう迷わない、クロックアップ！」≪ＣＬＯＣＫ　ＵＰ≫雨も止まり世界の時間も止まった、二体は俺を襲いかかってくるが俺は蹴りやカブトクナイで切っていく、≪１，２，３≫「もう俺は、この世界で人を死なせない、この手の中には、人を守る力があるんだからな、ライダーキック」≪ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ≫ライダーキックを決め二体は爆発をした。≪ＣＬＯＣＫ　ＯＢＡＲ≫雨は再び降り俺は変身を解いた。「うわぁあああああーー！！」俺は雨の中タダ叫んだ。

計画と別れ（後書き）

次回　暴走と正体

暴走と正体（前書き）

今回も頑張ります。

暴走と正体

二人が死に俺はその時から部屋にこもりっきってしまった。あの時から5日がたっている、

ドン、ドンと戸をたたく音がする「出てこい龍、気持ちはわかるが・・・頼む」あの日からずっと声を掛けてきてくれた、だが俺は答えることなくただ黙ったまま座っている。

その時、また怪人が現れた、行かなきゃいけないのか、でも・・・・・

「君はそうして部屋にこもるのかい？」みると窓に高田がいた。

「高田、なんで？」　「ずいぶんと、なさけないね、君の義理の親が死んだだけじゃないか。」俺は高田の襟をつかんだ、「てめぇ、もういっぺん言ってみろ」

「怒るな、でも君はどうして君の父さんの所に帰らないんだ。」

「お、おれは、」

「さっ、また暴れているやつがいるんだろ、行くぞ。」「ど、どうして。」

「さあね、」高田は俺の腕をつかんだ二階からとび降り「龍、どうしたのだ、」「毒島君、君も来るだろ。」「え、ああ。」冴子もついてきて俺達は怪人の場所に向かった。

「こうすれば来るんだろ」

「ああ間違いない総帥が言っていただろう。」見るとアンデット二体がたっている。あちらこちらで人が倒れている。「あ～～あ、これはひどい」「ほんとにひどいな、あの二体がこんなことを。」二体がこちらにきづく、「お待ちしておりました、さぁお父上がお待ちですよ。」アンデットが言うと冴子が木刀を持って行った「悪い

が、龍は渡さないどんなことがあろうとな」アンデットが笑う「この女、殺すか。」「やってみろ！、はぁ！！」冴子が立ち向かうがアンデットは完ぺきに遊んでいる俺はただ動かなかった、
「ぐ、は、く・・は」冴子がつかまり首を絞められている俺はようやく気づき「や、やめろ！！」
「いくらあなたでもそれは無理です、この女は反逆者殺すのが掟ですから」俺はあの二人が死んだことが脳裏に浮かんだ「うわぁ、あああああーーーー！！」その時、体から何か出てきた、メダル？いつの間にか腰に巻いていたオーズドライバーにセットされ、勝手に変身した≪プテラ、トリケラ、ティラノ、プトティラ～ノザウル～ス≫俺はオーズプトティラコンボに変身していた。

「がぁぁーーーー！！」俺は意味なく叫びアンデットに攻撃を仕掛けた。アンデット達は飛ばされた「こいつ、どうした！」「知るか、俺が聞きたい」俺は地面からメダガブリューを取り出し渾身の斬撃を加えたアンデットの一体が倒れた爆発した、「ば、バカな不死身のアンデットがやられただと、ここはいったん引くか。」≪スキャニングチャージ≫「え？」俺はアンデットをトリケラの角で捕まえプテラで冷気を浴びせティラノのシッポで粉砕した。「うわあああああ！！」俺はまた叫んだ。「龍、大丈夫か？」冴子が近づく俺はメダガブリューで冴子を傷つけた「りゅ、龍どうしたのだ、私だ、冴子だ忘れたのか？」「がああああーーーーーー！！」俺はまた冴子を襲おうとした。

その時、俺は銃弾で倒れた「まったく変な能力もって全然操れてない冴子くんきみは、離れたほうがいい」「龍・・」「うおおおーーー！！」俺は電柱などを切り付けて壊していく「ほんと、世話のかかる後輩だ」≪ＫＡＭＥＮ　ＲＡＩＤ≫「変身」≪ＤＩＥＮＤ≫高田は仮面ライダーディエンドに変身した。「手始めにこれかな」≪ＫＡＭＥＮ　ＲＡＩＤ　ＧＡＴＡＣＫ　ＧＹＡＲＥＮ≫すると仮

面ライダーガタックとギャレンが俺に襲い掛かってくる。「高田くん、君も龍と同じ、」「いや、彼みたいにいくつも持っているわけじゃないそれにこれは完ぺきな暴走だ、たぶん君が殺されそうだから無理な力が出たんだろう。」「龍・・」「さて、彼らががんばって、」見ると二人はやられて高田の前で倒れていた。」「まったく仕方がないか」≪ＡＴＴＡＣＫ　ＲＡＩＤ　ＢＲＡＳＴ≫あおの光弾俺を襲う、「ぐ、うおおーーー！！」「さて、そろそろとどめか」≪ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＤＩ　ＤＩ　ＤＩ　ＤＩＥＮＤＯ≫「がぁーーー！！」俺は倒れ変身が解けた。「さてこれで終わりかな、」「強い」
「当たり前、ま、仕方のないことだから」高田は俺を抱え家まで返した。

暴走と正体（後書き）

次回世界崩壊計画と2年半

世界崩壊と2年半（前書き）

訂正のお知らせありがとうございました。英語は自信がないんですよ、すみません。
また訂正があったら感想にお書きください。

世界崩壊と2年半

「気がついたか、よかった心配したんだぞ。」
気がつくと俺はベットの上で寝ていた。
「まったく、なんて生命力だふつうだったら死んでたかも知れないね。」
高田は窓のほうを見ながら言った。
「さ、冴子どうしたその腕。」みるとさえこの腕は包帯をしていた。
「ああ、大丈夫だやつらにやられたんだ。」冴子が明らかにうそをついているのが分かった。
「さて、話はここまでで冴子君は席をはずしてくれないかい？」
「ああ、わかった。」冴子が部屋から出て行った。
「さあ少し長い話をしよう説明は受け付けないのでよろしく」
「お、おう」
「この話は冴子君にもうしてある、僕は君と同じ転生者なんだ。」
「何？」
「質問は受け付けないと言ったろう、僕は悪の軍団が僕の世界を征服する13年前に生まれたんだ。すぐに母親は死んで父親一人に育てられた。父はトレジャーハンターで家の地下にはたくさんのお宝があった、その中でも特に父親が気に入っていたのがこのディエンドライバーなんだ、そして、僕の世界が征服させられる時、やつらは父の家のディエンドドライバーを奪おうとした、でも父は僕とディエンドライバーを逃がした。神が僕を次元移動をさせて逃がしてもらい高田という名前ももらいこの世界についた、というわけ、分かった」
「まぁ、分かった」　オレはうなずいた。
「さて、ここから冴子君にも話はしていないんだが、冴子君の

腕の怪我それは君がやったんだ」
「きみが仮面ライダーの力におぼれ、暴れてしまったんだ。」
「・・・・・」　「でも、そんなことはどうでもいい僕には別の用もあるし君は僕の代わりに世界を救うとゆう義務がある、」
「高田」
「気しっかりしたか？」　「じゃ、僕はこの辺で、ああ後、軍団がこの世界を征服する計画を決定した。次元転送装置も壊れてるしこのままじゃこの生活が出来るのも後２年半かな。」
「何でお前がそういうことを知っているんだ？」
「だって僕だもん」そう言うと高田は窓から降りどこかに言った。

「冴子いるんだろ入っていいぞ。」冴子はしぶしぶ中に入ってきた。
「高田のやつが全部話したその傷も俺がやったんだって。」
「こ、これは違うこれは本当にやつらに、」
「もうそんなうそはいい！！」
「もういいんだ、冴子」

とある所
「総帥、僕の部下の生命反応が消えました～～」
「総帥、私もう限界です、早く作戦を決定してください。」
「ぐ～～、まだわが子に忌々しい教育をしたやつがいるのか、もうめんどくさい！最終プログラム００（ゼロゼロ）を決定する。」
「ほう、総帥もばかじゃなかったか。」
「へ～～リュウガが珍しく総帥をほめてる～～～」
「でも、問題があります総帥、これには次元転送装置が不可欠なのに壊れていますこれでは実行は２，３年後かと。」
「ふん、残りの時間を楽しませればいいだけ、各自もそれぞ

れ≪あう≫人間をその世界で探すように、解散！」
「ね～ね～リュウガ君はどうやって≪あう≫人間を見つけたの～～」
「ふん、そんなの自分で見つけたな後は俺たちの姿が見えるやつか、」
「わかったよ、面倒だな～～」
そして舞台は2年半後あの日になる・・・・・

世界崩壊と2年半（後書き）

やっと次回原作と同じ場所にいきます。　原作の主役も入るので人数多いな～～

次回世界が終わった日と2年間のいろいろ

世界が終わった日と2年間のいろいろ

二年間と世界は変わってないが俺の回りは大きく変わった。俺は父さんの跡を継ぎ3代目会長になっていた。父さんの遺言書にそうかいてあったらしい。

冴子は得意の剣道で全国大会に行くなどすごいことをしたと思っている。

高田は相変わらず授業にでなっかったり出たりのくりかえしで、先生にあきられている。俺も2年生の後半から屋上で寝たり筋トレしたりしている。冴子には世界が征服計画が実行されることはまだ言ってない。今1時間目が始まり俺はいつものように屋上に行こうとした。

「おっ、小室君じゃないか、」

「あ、先輩おはようございます。」

小室とは最近サボり初めて仲良くなった後輩で屋上でよく話している。

「今日もサボりか？小室」

「はい、相変わらずです。」

二人で笑っているとしたから高城がやってきた。

「おや、高城さんがどうしてこんなとこに？」

「いいじゃない別に、黒鬼さんも相変わらず。」

高城とは高城の父さんと交流しているときに家にお邪魔するときよく会っていたから顔見知りなのだ、

「さて、話はここまでにして屋上に早く行かないと先生が来るぞ、」

「はい、先輩」

その時、「ふん、この感じ久しぶりか、」俺もこの2年間ライダーの力を制御できるようになり頭を抑える痛さはなくな

った。
「先輩？どうしたんですか。」
「え？いやなんでもない。」
「ん？ねえあれ何？」
見ると男の人が校門にガンガン当たっていて、先生達が止めに入っていた。
「どっかのへん・・・いや、小室！高城！少し目閉じてろ！」
俺は外階段から下に飛び降りた、
「こいつなんか違う人じゃないのか？」
先生達は男に質問している。
「先生たちはなれろ！そいつ普通じゃない」
もう遅かった。男にかまれた先生は他の先生を噛み、噛まれた先生がまた先生を襲う。
「小室！高城！逃げろ！なんかやばいからな、」
「え？でもこれって人が人を食っている」
「いいから早くいけ！俺も後をおう」
「分かりました、先輩」
「ばか！黒鬼さんをひとりにするのてか、なんでそんなとこにいるのよ。」
「そんなことは今はいい大丈夫だって絶対」
「ぐー、分かった、あんたも死ぬんじゃないわよ。」
「ふん、これで誰もいなくなった、足は遅いこれだったらやれる。」
その時、校門の所からイマジンが門を開けた。
「さぁ、入れそして世界を恐怖の渦に、」俺は何も言わずとび蹴りを入れた。
「なーー、貴様カッコいいことといっている途中だろが、」
「悪いな、あいつらのこといろいろ聞きたいんだが」
「誰が言うかばか」
「そーかなら、変身、」≪ＳＷＯＲＤ　ＦＯＲＭ≫俺

は仮面ライダー電王に変身した。
「ふん、お前は裏切り者！そーか、なら殺す！」イマジンが襲っていた。
戦っている間にも意味の分からないやつらが学校に入っていく。
「おらぁ！くそ中に入った，てめー邪魔だ、」
「げはっ、少しでも時間をかければ、やつらがこの学校を食い尽くす、これでこの学校も終わったな、」
デンガッシャーでイマジンを切りつける
「悪いがもうお前をとっ捕まえてやつらの聞くのはやめだ！
≪ＦＵＬＬ　ＣＨＡＲＧＥ≫
「おら！ていやぁ！はぁ！」
「ぐはぁーーー！！」　イマジンは爆発した。
「おい、やばいな、まず冴子を探しといたほうがいいかな、」
俺は地獄と化した学校に入っていった。

世界が終わった日と2年間のいろいろ（後書き）

次回出会いと地獄

出会いと地獄

「どうなっている、死んだ人間が生きた人間を食っている、クソ、邪魔だ！」

そういいながら手を食っていたやつに蹴りを入れるがまったくきいていない。

「ちっ、冴子を探すよりも生きている人間を探すのも苦労しそうだな。」

すると保健室から悲鳴が聞こえるた。

「悲鳴？この方向保健室か？」

俺は保健室に急いでいった。

保健室の前にはやつらが群がり人肉を食らう音がした、が、別にガッやバシッなどの音も聞こえた。

「おいここに誰かいるのか？」

「その声龍じゃないか。」

見るとそこらにやつらの死体があった。

「冴子、すごいな、でも無事だったのか、よかった」

「あのーお邪魔したら悪いと思うんだけど。」

「え、あ、すいません鞠川先生申し訳ない。」

「と、とりあえず龍、今からどこに行く？」

「まぁ普通は車で逃げるのがいいんじゃないのかな。」

「そうよね！車のほうが安全だし絶対それがいいわ！」

「さて、早く行ったほうがいいだろう行こう！」

「ああ分かった」

俺と冴子と鞠川先生はあわてながら職員室へと急いだ。

行く先々でやつらは群がった襲ってくる、冴子は問題ないでも俺は素手だでも問題ない。

「冴子見てろ俺の新しい力を！」
「新しい力？」
俺はそういった後にやつらの群れ野中に入った行った。
「龍！！」
その時、やつらの首が胴体と別れ頭が落ちた。鞠川先生が小さい悲鳴を上げる。
「やっぱり少し体が痛むか。」
俺は目を青くし手にはガルルセイバーを持っていた。
「龍、それは、」
「少し前、自分で試したら1部だが変身しなくても武器は持てるようになった。大丈夫問題ない少し体が痛むぐらいだ。」
「でも、その目。」
「キバの力の武器を使ったときだけこんな目になるようになっているらしい。」
「そうか、なら行くぞ！！」
「はいはい、あ、鞠川先生もはやく行きましょう。
「え、ま、まって〜〜」

「職員室は近い！いくぞ！」
「待て冴子、職員室の前にやつらと生存者がいるやつらは俺がかたずける。」
俺はガルルセイバーで一瞬のうちにやつらをかたずけた、見るとそれは高城で俺がやっつけたやつらの血をつけてしまっていた。
「高城！生きていたか俺はてっきり死んだのかと。」
「勝手に殺すなバカ！！」高城が涙目で叫んだ。
その後に、
「先輩、生きてたんですか。」見ると小室ともう一人宮本麗の姿があった。
「まぁ、俺だからな。」見ると知らない顔が一人。
「君は誰だ？俺は3年A組の黒鬼　龍だよろしくでこっちが

同じくA組の毒島　冴子だ、」
「あ、僕はえと、B組の平野　コータです。」
「僕は小室　孝　2年B組でこっちは同じく、」
「宮本　麗です、よろしく。」
「ああ、よろしくて言いたいんだが早く職員室に入ろうまためんどくさいのが来ても困る。」
「ああ、そうしようでわないかみんな。」

「あ〜あ、みんなどこかな〜〜人間見つけたら殺していいって言われたのに生きてる人間がいないせっかく≪あう≫人間がいたのにぃ〜〜」男はそう文句を言いながらやつらを殴りながら人間を探していた。

出会いと地獄（後書き）

次回脱出と望まない再開

脱出と望まない再開（前書き）

お知らせ
死ねなど不愉快な感想があったので今から感想を受け付けなくしました。
まだまだ未熟で間違いもありますがどうか温かい目で見守ってください。

脱出と望まない再開

職員室に入った俺たちはバリケードを作りつかの間の休憩をしていた。

「先生車のキィありますか？」

「あ、たしかここに。」鞠川先生がかばんの中を探す。

「で？全員乗れんのかその車にわ。」

「うっ、コペンです。」

「はっ、じゃあ無理か・・そうだな部活遠征用のバスならここに鍵もあるしまだバスもあるだろう。」

「で、小室お前は学校から出たらどうするつもりだ？」

「家族の安否を確かめ無事なら一緒に安全な場所を探します。」

「家族・・・か」

「あ、すみません先輩」

「ああ気にするな俺には家族と呼べる部下がいるからな。」

俺は笑った。

「はぁ・・・」

「・・・何、これ」宮本がテレビをつけてそういった。

見るとこの現象は世界中で起こり世界中がパニックになってい

てもう壊滅的危機でという。俺はただ黙っていた。

「とりあえず出るぞ、もういる必要はないからな。」

「せ、先輩僕が援護します。」

「平野君かよろしくな、さて行くか。」

俺たちは職員室を後にした。

「ちょっと、龍さん。」

「何だ、高城。」

「今まで無視したけどその剣は何そして何であなたの目は青

くなってんのよ！」
「ま。まぁ気にするなそれより階段下に生存者とその他だ。」
見ると階段下で奴らと戦っている男女のグループがいた。
「龍、私が行こう」　「僕も行きます。」
冴子と小室が奴らの後ろからガンガンと倒していった。
「やるね～～」俺はそういいながら階段を下りた。
「この中に噛まれたやつはいるか？」
「い、いませんいません」グループの中の女子が首を振る。
「僕達は学校を出ます行きますか？」
「ええ、もちろん」
そしてこのグループは大きくなった。

玄関までつくとみんな逃げただけあって外や玄関に多くいる。玄関のドアはしまっている。
「先輩、奴らが多すぎます。」
「仕方がない俺かがおとりになって奴らの注意を引くからお前達は逃げろ、分かったな」
「でも、龍おまえが、」
「心配するな冴子、俺は大丈夫だ。」
俺はみんなと離れた場所に移った。
「さて、おら！！こっちだ早く来い！！」
俺は声を上げ奴らを呼び集めた。
「よし、これであいつらも、」
その時、カーン！と何か高い音がし集めた奴らもそっちのほうに集まっていく。
「くそ、なんだ！！」
俺は急いで小室たちのほうにむかった。
「おい！小室！！どうなってる！」俺は奴らをきりながら言

った。
「はい、玄関を出るときさすまたを持っていた人がぶつけたんです。」
「何！・・・分かった早く逃げるぞ！おら！邪魔だ！」
バスにつくまで5分かかったがそれまでに二人なくなった。
「全員乗ったか？冴子お前から乗れ。」
「待ってください先輩！」そういったのは宮本だった。
「よせ麗、」小室が止めに入る。
「どうした？何かあるのか？」
「いえ、なんでもな、」
その時、
「「待ってくれ～～」」
向こうから声がする。
「生存者か？6人、中に紫藤がいるな、」
「紫藤・・・」　宮本の顔がこわばる
「まて麗、中に永がいるぞ。」
「え？ほ、ほんとだ永がいるわ。」
「そんなこと今はいい冴子あと少し時間稼げるか。」
「もちろんだ。」
「そうかっ・・・・！この感じ、誰から俺たちの中からじゃない向こうの紫藤たちからか？」
「先生出せるか？早くしてください！」
「えっでも・・・」　先生が紫藤たちのほうを見る。
「何でよ！先輩どうして？」宮本が泣きながら訴える
「どうして！龍さん？生存者は出来るだけ確保しといたほうがいいに決まっているじゃない。」
「くっ、・・・・分かった。」俺は覚悟を決めた。
紫藤たちがもうすぐバスに入ってきて最後に永が入ろうとして宮本が抱きつこうとしたその時、
ガッ！永の手にはゼクトクナイが握られてあり俺は宮本をか

ばい腹を刺された。
「ぐはっ！く、くそが！！」
俺は永を蹴飛ばし永はバスから落ち、俺もバスから降りた。
「ひ、永なんで？」
「ぷ、ひ、永なんで？だってくはははははーーー笑えるーーー」
永は腹を抱え笑っている。
「僕は永じゃないいや、永という体を借りているものだ僕の名前はダークカブト君たちを殺せと命令されたんだ。」
「う、うそよね？永。」
「うそじゃないよ、さて話はおーわり。いまから殺したあげるから黙って死んで。」
永はダークカブトゼクターを呼び「変・・・身」≪ＨＥＮＳＩＮ≫仮面ライダーダークカブトに変身した。
「これで信じてくれるかな？」
「う、うそ」
「てめー最低じゃねーか！」
「ぷぷっ、僕こういうの大好きなんだ。」
「くそがっ！くっは！」
「さて、殺しますか、まず、下手したらすぐに傷の回復をするあんたから殺す。」
クナイが振りかざされる。
「やめろーーーーー！！」冴子が叫ぶ
その時、
バンバンと銃声が聞こえダークカブトはそれをよけた。
「誰だ！！僕の邪魔をしたのは！」
「やっと見つけたよ僕のお宝ちゃん」
上からを降りてきたのは高田だった。
「僕は邪魔されるのが一番嫌いなんだ！！まずあんたから殺す！！」
ダークカブトが攻撃を仕掛けただが、高田はかるがる避けてい

る。
「今はちょっとお前の相手をするには場が悪いんでね。」
≪ＫＡＭＥＮＲＡＩＤ　ＨＥＡＣＵＳ　ＫＥＴＡＲＯＳ≫
ディエンドライバーから仮面ライダーヘラクスとケタロスが出てきた。
「な、これはどういうことだ？」
「君には理解できないだろうがまぁがんばってね。」
俺は高田に担がれバスの中に乗せられた。ダークカブトは二体と戦っている。
「先生、バス出してくれます？」
「え、は、はい行くわよ～～」
バスは柵を飛ばし学校から脱出した。
「くそ！仮面ライダーディエンド絶対殺す！！」
ダークカブトは戦いながらそう言った。

バスの中、泣いている宮本を小室が慰めるなか俺はバスの席に座らされた。
「龍、大丈夫か？」　冴子が心配して来た。
「まったく情けない君だったら避けれるでしょうが普通。」
「・・てめー・・・見てたのか」
「そんなことより龍さんの傷がひどい、鞠川先生傷の手当てをこのままじゃ死んじゃうわ」　高城が叫ぶ
「じゃあ紫藤先生バスの運転を、」
「そんな・・・必要は・な・い」
「あんたバカじゃないのこのままじゃ本当に、」
「心配ないこんなの自分で治せる。」
「先生、僕が運転かわるから龍を見てよ。」
「高田君、きみ運転なんか出来たの？」
「ええ、だから早く見てやってください。」
「分かったはじゃあお願いね。」

「はい。」　高田は笑顔で答えた。
高田は運転がうまく心配してた全員は再び俺に視線をやった。
「まず、傷の状態を見ましょう、ちょっと痛いけど我慢してね。」
鞠川先生が俺の傷を広げる。
「なにこれ？人の骨格じゃないこれは機械？」
全員がこちらをみて冴子も気まずそうに俺を見た。
「龍、もうみんなに説明したらどうだ、言い訳も出来ないだろう。」
「まずは傷を閉じさせろバカ。」
「こいつらなんなんだ、ふふっまぁいいこれだけの戦力がいれば今後は大丈夫か。」
こんなこと思うのはただ一人紫藤である。

脱出と望まない再開（後書き）

次回修理とリーダー

修理とリーダー

「とりあえず、話したいんだがとりあえず体を修理しないとな、確か平野君きみ釘を持っていたよね？」

「え、はい、釘なんかでどうするんですか？」

「聞いてなかったのかお前は？修理だ修理本当はねじがいいんだがな。」

「わ、分かりました」

平野が釘打機の銃の中から釘を3本くれた。

「さて、中の部分は大丈夫だからな腹の傷を止めるだけで十分か。」

俺はそういいながら腹の傷を止めようとしたがとまらない。

「ああもうめんどくさい、やめだやめだ。」

俺は席から飛び起きた。

「黒鬼君きみおなかの傷・・」鞠川先生がおろおろしている。

「ばか！死にたいの。」高城が叫ぶ

「心配ね～よ、はじめは痛かったがもう痛みの神経をここだけ止めたから大丈夫だ。」

「なによそれ、はちゃめちゃじゃない。」

「先生、バスの運転もう変わっくれてもいいですか。」バスの運転席から高田の声がした。

「あ、ごめんなさい、でも・・・」

「心配ないですよ、そいつは普通のことじゃあ死にませんから。」

そう言うとしぶしぶ鞠川先生は運転席に戻った。

「さてと、龍そろそろ話をしようか。」

「ああ、別にかまわないさ。」

「龍、私も聞きたいぞ。」寄ってきたのは冴子だった。

「冴子、お前には関係のない話だろ。」

「いや先輩、僕達にも話してくださいこのままスルーなんてしませんよ。」そう小室がいってきた。
続けてぼくもわたしもとバスの中のほとんどが言ってきた。
「ぐ、しかたがないこれから話すことは全部事実であり、質問はするな。」
俺はそういいながら少しだが真実を、俺の体が機械で出来てること、高田のことそして俺の生みの親がそのボスであることを話した。

俺の話が終わり初めに話したのが高城だった。
「信じられないわいまだにうそとも断定できないし。」
「あのウハァー、ウハァー言っている奴らは信じるんだろ。」
「ぐ、分かっているわよ、私は天才なんだから。それよりも奴らは何？」
「それは僕が説明しよう。」そう言ったのは高田だった。
「あれは世界を破壊するために作られたウィルス、名前は分からないがまったくゾンビ映画と同じになる、世界じゅうに１００体送れば勝手に世界を地獄に変えてくれる。そしてこれはあくまで予想なんだがこれは実行には普通、敵性戦力が多い世界に使われることが多い、なのにこの世界はそんなことはしていないのになぜ最悪の方法がとられたか・・・」
「・・・おれがこの世界にいるからか？」
「それ以外に何がある？きみは敵のボスの息子でありその父さんを裏切ったんだ。」
みんなの視線が俺のほうに向く
「クソ！こいつのせいで！こいつのせいで！」
後ろから不良のやつが俺を殴ろうとしたその時、
ガッ！！と宮本と冴子が俺を守ってくれて冴子の木刀が不良の腹に入っていた。
「ぐはぁ、おえ～～～」

不良は嘔吐しもがいている
「宮本・・・なんで。」
「勘違いしないで、これはあのときのカリを返しただけだから。」宮本はそういって小室の横に座った。隣の小室がすみませんと首を振った。
「龍、気にするなこんな、」
パチパチパチと紫藤が拍手をしていた。
「すばらしいです宮本さん毒島さん、確かにその話が事実なら彼のせいでしょう。しかし！彼もわれわれの仲間！恨んでは可愛そうです。」　紫藤が笑みを浮かべながら言う。
「どうですか皆さん、起きたことを言っても仕方ありません。だから生き残るのです、この世界で、しかしそのためにはリーダーが必要です、そう冷静な判断を出来るリーダーが。」
「候補はあんた一人見たいね。」
「私は教師ですよ高城さんあなた達生徒と比べれば資格の有無ははっきりしています。どうですか私なら問題が起きないように手を打てます。」
後ろから拍手が飛び交う
「と、言う訳で私がリーダーになりました。」

「いやだね。」そう言ったのは高田だ
「な、なんですかもう投票で決まったんだすよ。」
「何で僕が誰かの下につかなきゃならないんだ、それに僕にはやることがあるんだ君たちははっきり言って邪魔なんだ。」
「ですがここにいれば安全で、」
「理由は聞きたくない、お前の声聞いてたら脳が腐る。」
≪ＡＴＴＡＣＫ　ＲＡＩＤ　ＩＮＶＩＳＩＢＬＥ≫
「き、消えた・・・まったく仕方がないですね、もちろん黒鬼君は残ってくれんでしょうか？」
「ふん、わからね～～」

その時、ドォーーーン！と車の外で爆発する音が聞こえた。
バスは無事だがみんな頭を低くしている。
「先生、先生！！ブレーキ！！」
「ひぃーーー！！」
バスは無事とはいえないが止まった。
「目標発見、これより反逆者の抹殺を開始します。」
後ろには仮面ライダーＧ４がいた。

修理とリーダー（後書き）

次回脱退と特権

脱退と特権

「目標発見、これより反逆者抹殺とその他の人間を抹殺および拉致を開始します。」

Ｇ４はただそれだけを言いバスを撃ちながら歩いてくる。

「くそ、無茶苦茶だな、おい」

「うおっ、おい！黒鬼！早く行け！目的はお前だろうが！」

不良のやつが叫びながら言う。

「てめーの命令なんか聞くか、バカ！（だが確実にやばいな、俺が行くしかないのか？）」

その時俺を腕をつかむ冴子がいた。

「龍、まさか行く気じゃないのかやめてくれ！たのむ・・・」

「無理だ俺が行かないとここの人間を最低の人間だが守らなきゃならない。」

俺は冴子を振り切りバスを出た。

「・・・バカ、」

Ｇ４はまだバスを撃っている

「やめろ！お前の目的はこっちだろう。」

Ｇ４はこっちを向いた、だがまだ銃を撃ち続けいる。

「おい！クソが無視すんじゃねーー！」

Ｇ４の銃の向かって蹴りをくりだし銃は高く舞った。俺は攻撃を仕掛けるがＧ４は全てを受け止めた。足からナイフを取り出し攻撃してくる間違いなく俺の傷を狙っている。俺はいったん距離を置いた。

「今です、鞠川先生バスを出してください。」紫藤が立ち上がりながら言った。

「え、でも。」

「そうだ、龍を見殺しにするきか！」冴子が食って掛かる。
冴子の事を無視しながら続ける。
「鞠川先生考えてください、今多くの生徒とあなたの命が危険にさらされているんですよ。」
「わ、分かりました。」鞠川先生がバスのエンジンをかける。
「待ってくれ鞠川校医、もう少し。」
「これ以上は本当に危険なの毒島さんそれに、」鞠川先生は外を見る、外にはたくさんの奴らがいた、爆発を聞きつけて来たのだ。
「じゃあ私一人でも降りる鞠川校医それだけなら出来るだろう。」
「それはだめです、もうたくさんいますもうドアを開けるのも無理でしょう。」紫藤が冴子を肩を持ちながら言う。
「最初から分かっていたことなのか？」
「さあ？何のことでしょうか？鞠川先生バスを出してください。」
「はい、」バスのアクセルを踏みバスが動く。
「いや！放して！龍！！」
俺はただバスを眺めていた。

「仲間から見捨てられたこれはつまりあなたはあの中で邪魔な存在だと認識できますが。」
「ふんバカが、・・・・鞠川先生は分かってくれたんだな。」
「？・・意味が分かりません。」
「俺が今からお前を倒すと言ったんだよ。」
俺はポケットからバックルを取り出し
「変身」仮面ライダー龍騎に変身した。
「しゃぁ！いくぜ！」
「第二目標のバスが逃走これからミッションを変更し第一目標も抹殺を開始します。」

「鞠川校医なぜ降ろしてくれなかった。」冴子が小声で訊く
「黒鬼君に頼まれたからよ。」
「え？」
「自分がバスを降りれば冴子もきっと一緒に降りると分かっていたんでしょう頼むからバスのドアを開けないでって、ふふっ、若いっていいわね。」
「・・・龍。」冴子は泣いていた。

「くっ、予想以上の身体能力、反射神経ですね。」
「くそー体が全快なら問題ないんだがな。」
バックルのカードをドラグバンサーに入れた≪ストライクベント≫
ドラグレッターの頭部を模した武器ドラグクローを呼び出した。

「くらえ！」前に突き出し昇竜突破を放った。
だがＧ４はそれを避ける。
「だーくそ、おとなしくやられろ。」
ふたたび放つ
「同じことをやるとは学習能力ない人だ。」
Ｇ４は再び避け俺との距離を詰める。
「へっ、それはどうかな。」
バンサーにカードを入れる≪アドベント≫
鏡の中からドラグレッターが火を放つ。
避けようとしたが反応が遅かった。
「ぐはっ！う、腕の反応がなくなった。」
見ると人間の腕が火傷をしている。
「お前も人間の体を借りて、」
「ええ、でもあなたには関係ない。」
「　いちいちめんどくさい野郎だ、さっさとくたばれ！」

≪ファイナル　ベント≫
ドラグレッターを呼び出し腕を前に出し腰を低くし構える。
「い、一時撤退」
「逃がすか！」
「おらーーーーーーーーー！！」
「ぐわぁーーーーーー！！」
煙がなくなり辺りを見ると地面には奴らしか倒れていなかった。
「ちっ、逃がしたか・・・」

「しゃあ！あのやろーがいなくなってせいせいしたぜ。」
バスの後ろではそんなことを言いながらはしゃいでいる。
「あんたバカじゃないの龍さんが戦ってくれたから私たち生きているんでしょうが！」高城が不良に向かって叫ぶ。
「何だとこの女！」
「やめてください、そんなこと言っては可愛そうですよみなさん黒鬼君の行為を無駄にせずにしっかりといっしょに生きていきましょう。」
その時、
「いやだ！あんなやつと一緒なんて私降りる。」そう言ったのは宮本だった。
「鞠川先生、降ろして！」
「え、でも。」
「奴らなら黒鬼さんの所だから大丈夫、降ろして！」
「麗、」
「孝あなたはどうするの？」
「分かった僕も降ります、麗行こう。」
「仕方ないですね、一緒に行動が出来ないので残念です。」

「行こう！孝」
その時、
もう1台のバスがこっちに向かって突っ込んできた中の人たちは奴らと化し運転手も噛まれていた。
「ぶ、ぶつかるーー！」
「きゃーーーー！」
≪ファイナル　ベント≫
「え？」
「伏せろ小室、宮本！」
「その声、まさか」
ドカン！と大きな音がしバスは仰向けに転がりぼうぼうと燃えている。
「けほっけほ、ああーミスったーー」
「先輩！だいじょぶ・・誰ですか？あなた」
「誰ってお前なー！あ、そうかこの姿見るの初めてなのか。」
俺は変身を解きすがたをみせた。
「先輩、生きてたんですかよかった、毒島先輩も心配をしていたんですよ。」
「龍、無事だったのか。」冴子がバスの窓から顔を出している
「冴子！心配かけてすまん、そっちに行きたいのはやまやまなんだが炎があっていけそうにない、だから橋だどこでもいいから橋に集合だ橋にいればすぐに分かる！」
「時間は？」
「午後5時だ今日出来ないなら明日の同じ日に」
「分かった！」
「鞠川校医！ここはもう進めない。」
「じゃあ！別の道に」
バスはUターンし別の道にいった。
「さて、俺たちはどうするかな？」
「なんでよ、」

「あ？なんだ？」
「何でそんなにへらへら出来るのよ！永は、永は！あんたがこの世界に来たから変になっちゃたんでしょ！」
「麗、落ち着け」
「落ち着けですって！」
周りには燃えた奴らがこっちに来ている。
「さて、怒りは治まったか？まぁお説教は後で聞いてやる。分かったか。」
「・・・・・・」
「先輩、どうするんですかこいつら」
「大丈夫、助っ人呼んだから。」
「助っ人？」
その時、空から銃弾の雨が降り奴らはばたばたと倒れた。
空にはオートバジンがいた
「あれが助っ人、分かる？」
「ああ、はい」　小室も宮本も空を見上げている。
バジンが地面に降りバイクにすると二人はまた驚いた
「さて、小室は・・・あの落ちているバイクを使え」
「免許持ってたっけ？」宮本が小室に聞いてきた。
「無免許運転は高校生の特権！」　小室はそう答えた
二台のバイクはエンジンを吹かし走った。

脱退と特権（後書き）

次回理解と恐喝

理解と恐喝（前書き）

投稿遅れました申し訳ありません。

理解と恐喝

二台のバイクで走った、ただ、何かに逃げるように。

そして俺たちは、生存者を捜していた。

「ここにもいないですね、黒鬼さん。」

小室が小さな文房具屋を見ながら言った。

「逃げたか、もしくは・・・」

俺は黙って空を見た

「・・・ねえ、あれ、」

沈黙を破ったのは宮本だった。みると道路の角にパトカーが止まっていた。

「黒鬼さん、あれ。」

「ああ、高校生の無免許に二人乗り、間違いなく捕まるぞ。」

俺達はパトカーまでバイクを走らせ行った。

が、結果は無残にも電柱にパトカーが突っ込んで前がへこんでいた。

「・・・・・ひどいな」

これが俺が言えるせいいっぱいの感想だった。

俺が言い終わる前に宮本がパトカーに歩いて行っていた。

「麗、危ないぞ、ガソリンがもれてるんだぞ！」と小室が止めようとするが、

宮本はパトカーの中に入り動きを止めようとしない。

「言っても無駄だ、でもあの女、たくましいね～」
「いや～毒島先輩もたくましいですよ。」
「はっ、そうだな」
男二人の雑談をしていたら宮本が手に何かを持って帰ってきた、みると拳銃と銃弾が握られていた。
「・・・銃か？」
俺は拳銃を持ち銃弾を見た、幸い全弾入っていた。
「扱い知ってる？」
宮本が俺たちに尋ねる。
「俺は知ってるぜ、持ったことも、打ったこともある。」
「じゃあこれは先輩が、」
小室が俺が持っていた拳銃を指差す。
「やめてくれ、俺が戦うのは拳銃でどうにかなる相手じゃないことわかっているだろ。」
俺は小室に拳銃を渡した。
「あくまで護身用、打つんだったらなるべく近くの敵を討てよ。」
「・・・・はい」
小室が自信なさげに言う。
「さ～て、この話は終わりだ、生存者を見つけながらどこでもいいから橋に行くぞ」
「あの、黒鬼さん、ガソリンがありません。」
「もうないのか？・・・わかったガソリンスタンドを探そう」
そして俺達は、ガソリンスタンドを探した。
以外にもガソリンスタンド早く見つかりガソリンを入れようとしたが運が悪くセルフ式で金がないので小室がレジで金を持っ

てくるまで、俺と宮本の二人になった。
いざ二人になると話す会話がない。
「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・ねぇ」
長い沈黙を破ったのは宮本だった。
「ん？なに？」
「そのバイクどうして空から来たのよ？」
宮本が俺のオートバジンを指す。

「ああ、学校に置いてあったバイクに手を触れたらこいつになった。」
「そんな嘘、」
「俺は真面目だぞ。」
「でも、・・・・・」
宮本が笑いをこらえる
「ぷっ、ひどいな、こっちはほんとうにまじ・」

ガっ、と鈍い音がし宮本の首を後ろから絞めているダークカブトがいた。
「・・・くっ、苦しい・・・・」
「宮本！！」
「くっ、殺す、やめろ、うるさい・・・・・・・」
ダークカブトはぶつぶつ独り言を言っている
すると、何かが切れたよう顔を上にあげる。
「はっあ、あはっ、やあ、久しぶりでも、５時間ぶりぐらいかな？」
「てめー、宮本を離せ！！」

外の騒ぎを駆けつけ小室が外に出てきた。
「黒鬼さん、何が・・麗！！」
「た、孝・・・た・す・・けて」
「・・・・・・麗」
ダークカブトがその言葉を発した。
ダークカブトが手を宮本の首から離した。
宮本が倒れた。
ダークカブトが後ずさりする。
「ぐあっ、な、なんで・・僕は・・・た・・・かし」
「その声、永か？」

「もう・・・だめ・・だ、　僕を・・・・・ころ・・・殺してくれ！！」
最後の言葉だけはっきりと聞こえた
「永、駄目だ僕にはできない。」
俺は宮本と小室の前に立った
「・・・・黒鬼さん？」
「ライダーを倒せるのはライダーのみ、俺がやるが、いいか？」
二人の顔を見ずに俺は言った。
「でも・・・・・」　「早く殺してくれ！！小室！」
「ああ、ああーーーー！！」　小室が叫ぶ
「・・・・・・・お・おねがいします。」
小室が泣きながら言う
「わかった！！」
俺はポケットからAのカードとブレイバックルを取り出し、カードをバックルに入れた
「変身！」　『Ｔｕｒｕ　Ｕｐ』

仮面ライダーブレイドに変身した

「心配するな、痛くはしない。」

「ああ、」

ダークカブトは体を大の字に広げた

「やめろ、やめろこれは僕の体だ！僕はやれたりしないんだーーー！」

『キック　サンダー　ライトニング　ブラスト』

「はああーーーーー！！」

「ぐあっ、・・・これで・・・いい」

「ぎゃあーーーーー！！」

ダークカブトは吹っ飛びながら爆発した。

少しあたりは暗くなっていたが小室は宮本を抱きながら泣いていた

「ぼくは・・・正しい選択をしたんでしょうか？」

独り言のようだが確かに俺に対しての問いかけだった

「正しい選択なんてない、だからお前は間違ってない、問題はこの後どうするかだ、過去を振り切れ！！小室！！」

「・・・・・はい」

小室の涙は止まった

「ガソリンを入れろ、いくぞ」

「はい」

宮本の顔がなぜかうっすらと笑みを浮かべた

理解と恐喝（後書き）

次回変身と傭兵

変身と傭兵

とある空間の狭間・・・・・・
ここには、多くの世界を破壊し我が物にした親父、いや最悪の悪がいる戦艦がある場所

「提督様、やつらが来ました。」
部下の一人が提督の前でひざまずく
「ほう、次元転送装置が壊されたのによくこれたなぁ、まぁいい通せ。」
「はっ！」

と同時に大きな門が開き武装をした一人が入ってきた
「ん？残りは？」
「次元移動の準備だ、来たことを連絡するぐらい俺一人で十分だ。」
「そう・・・か、・・・・おい、3番目のあれをもってこい。」
そう提督は、近くの部下に持ってこさせようとした
「提督様、それは危険です。あれはまだ試作品で。」
しかし部下の上位らしき人物が止めに入る
「いや、試作品のテストもしてないから、ちょうどいいだろ。」
「いや、ですが。」

「だれに命令してる？てめー」
提督の目が不気味な紫に光り、辺りが凍りつく
傭兵以外は腰を抜かしている

「ひっ、わ、分かりました。おい、持って来い。」
止められた部下は起き上がり再び足を進めた

「なんだ？」
「次元の移動のダメージを助けてくれるし、後々使えるものだ」
「ほぉー」
「使い方と今回の任務の目的と報酬は全部トランクの中に入っている、それにお前だけ特別をやろう。」
「特別？」
「私に恐怖しなかった褒美だ、受けとれ。」
そう言うと、提督は、手を前に出し小さな光のようなものを傭兵に投げた
「ありがたく受け取るぞ」
傭兵はこの部屋を出て行っていった
「おい、リュウガを呼べ」
「分かりましたが、なぜ？」
「あいつにも、仕事が出来た」

ここは、鞠川の友達の部屋
あれからバスを脱出した冴子たちと合流し夜になるという理由からここにいる避難している。女子達はお風呂で入浴中だお決まりの展開にしようとしたら平野に止められた。本気だった俺に耐えれられなかったらしい。
小室は、まだ悩んでいた、顔には出さないが自分が願ったことは正しかったのだろうか悩んでいる。宮本は気絶していてまったく覚えていないらしい、小室には「言いたかったいえ、俺は罪を背負う覚悟はある。」と言っておいた。

トイレから帰ってくると二人は鍵のかかったロッカーを開けて平野が一人で騒いでる。小室は俺に背を向け一人ほおずえをかいていた、俺は小室の隣に座りポケットからキセルを取り出した

「せ、先輩なにやってんですか！」

「ん？なにってタバコ」

「いや、タバコもだめだけど何でキセル？」

「ああ、父さんの形見だよ、ちょっと前まで持っているだけだったんだが、やめられなくって、これが」

「あの～二人とも」

平野が抱えきれないほどロッカーにあった銃を持っていた

「あ～あ、平野くんそういうのは一人前の左翼のひとにならないとだめだぜ」

「いえ、ちがうんです、さっきから外でデモをしていた場所から声がしなくなったんです、」

「なに？」

「それに、あれだけ明るかったあの橋が暗いんです。」

そう言いながら俺たちはベランダに出た、平野は双眼鏡を俺に渡してくれた、そこは確かに暗く、何か不気味な感じがした

その時、バンバン！と明らかに近い場所で銃声が聞こえた、音のほうを見ると銃を持った男が他の家に侵入し中の人を殺していたのだ

「あいつ、何でこんなことを、」

「黒鬼さん、あっちにも！」

見ると、反対の家にも武装したいかつい男が家の中に入ってくるのが見えた、それにつられて奴らが入っていく

「先輩！あそこの家には小さな女の子が庭に」

「ちっ、こう同じ目的の人間が3人もあの子だけでも助ける」

俺はベランダから飛び降りその女の子のところまで走った、皮肉にも奴らは他の家に入っていっているのであまり数がいない、そのため余り時間がかからず家までついた

「おーい、こんな子も殺すのか、未来が楽しみなのによー」

長い棒を持った男が女の子に顔を近づけながら言う

「ひぃっ」

「おいおい、泣くなよ、めんどくせー、まっいっか食っちゃえ！」

奴らが女の子を食おうとする

「助けて、誰か」

『アドベント』

仮面ライダー龍騎となった俺はドラグレッターの攻撃に合わせて女の子を救出した、奴らは燃えたが男は火がついたまま道路に転げただけだった

「大丈夫か？お嬢さん」

「・・・・・・・・」

気絶していた

「・・・・・・まあいい、バジン！この子を頼む！」

空から降りてきたバジンに女の子をたくし俺は変身を解いた

「・・・・ってーな、こら！」

男は火を消しながら言った、男のやけどが回復していく

「なに？」

男は俺を見て無線機を使った

「アーアー俺だ、見つけたぜターゲット」

男はポケットから灰色のメモリを取り出した

「変身」

『ＭＥＴＡＬ』

手を離したと思ったら、メモリは男の体のまわりを回

転し背中に入った

体が変わりメタル・ドーパントンになった

「任務開始」

変身と傭兵（後書き）

次回　無茶と永遠

無茶と永遠（前書き）

途中からドーパントが面倒なので省きます

無茶と永遠

メタル・ドーパントは、俺の肩を持ち後ろの民家のドアまで押してきた

そのまま、背中にドアが当たる

「ぐっはぁ！」

「まだまだーー！」

メタルは俺を投げ飛ばし、反対の道路の壁に体をぶつけた

「くっつうーーー、なんてバカぢからだ」

その時、バンバンバン、と銃弾がこちらに降ってきた、避けることがかろうじてできて降ってきた方を見ると、３人の武装した大人達がいた

一方こちらは緊迫した空気が漂っていた、風呂に入っていた女子は出てきてやっと状況をつかめていた、ベランダには冴子と平野、小室が立っていた、他のみんなは逃げる準備をしていた

「毒島先輩、黒鬼さんが心配なのは分かりますが、」

「わかっているよ、自分が今しなければいけないことが。でも、待ってほしい、龍が・・・・・いや、帰ってくるのを待ちたいんだ。」

「先輩・・・・・」

「・・・・・っ小室！君は逃げる準備を手伝って！」

「でも！」

「大丈夫！毒島先輩は僕に任せて、それに黒鬼先輩の出来れば奴らを脱出まで食い止めないといけないから、早く！」

「・・・・・わかった」

小室はまだ何か言いたそうな顔をしながら部屋に入った

武装した女が拳銃を俺に向けた
「こいつが依頼主の息子～？少しはかっこいいと思ったのに」
「いや、でも私は、好みだけどな～」
いかつい男がオネエ口調で言う
「・・・・・・・・」
女の拳銃より大きい銃を持った男はなにも言わない
「・・て、てめ～らは全員味方じゃ、なさそうだな。」
俺はゆっくりと立ち上がった
「おいおい、あれだけ食らってまで死なないなんてな、驚きだぜ」
メタルが家から出てくる
「あいにく、体はタフなんでね。」
「じゃあ、殺す。」
女が言ったとの同時に、メタル以外の3人がメモリを取り出した
「・・・・ガイアメモリか、」
「そのとうりよ、ぼう～や、ご褒美を上げたいけどもうすぐ死んじゃうからね。」
『ＨＥＡＴ、ＬＵＮＡ、ＴＲＩＧＲＥ』
3人はメモリを投げ、引かれるようにそれぞれの体に刺さる
「やばいな、こりゃ」
小室は、準備をしようとキッチンにいた

「・・・・・・・孝」
宮本がキッチンに入ってきた
「麗、もう大丈夫なのか」
「もう、何度も言わせないでよ、孝」
「・・・・・・すまない」
宮本が小室に近づく
「孝、顔、怖いわよ」
「・・・・・・・・・・・・」
「隠さなくてもいいわよ、永のこと」
「!!」
「気絶したのは嘘よ、」
「じゃあ、何でぼくに本当のことを言ってくれなかったんだ!」
「あなたの顔を見てるときっと何か悪いことがあったなんてすぐにわかったわ」
「でも、僕は永を殺した!僕が殺してくれと頼んだんだ!」
小室が顔を手で覆う

「・・・・・バカ孝!」
パン! と宮本の平手打ちが小室のほおを直撃した
「麗?」
「永は死んだわ、でもそれは永も望んだことなのよ、あなたが悔やむべきことじゃないわ」
「・・・・・・・・・」
「ねぇ、あなたはどうしたいの?」
「龍!お願いだやめてくれ!」
ベランダで冴子が叫ぶ

「麗、逃げる準備をしてくれ、僕が見てくる」
「うん！」

「ちっ、さすがに４対１はきついね～」
俺はキバに変身していたが、向こうの連携攻撃に手も足も出なかった
「その言葉、いつまでもつかね～」
メタルがパンチを加え、ヒートの蹴りが来る
うまくかわしたがトリガーの銃口が火を噴いた
「ゲーム・オーバー」
バァン！　と言う衝撃音ともに俺は遠くに飛ばされ変身が解けた

少しの間俺は立つことが出来なかった
「・・・・・弱い」
「そうね～わたしもど・お・か・ん」

「誰が弱いだー！」
「間で立つか、しつこいわね」
ヒートが火の玉を投げた、それは俺に直撃だったが、

俺のベルトにはオーズドライバーと3枚の紫のメダルが入っていた
「守ってくれたのか？」
メダルが答えるように紫に光る
「使えと言うことか？」
「やめろ！龍！」
見ると冴子がリビングで叫んでる

「冴子、俺は・・・・」
メダルが激しく光る
その後、俺は意識をなくした

『プテラ・トリケラ・ティラノ　プトティラノザウル～ス』
「ん？あれ？なんか暴走してないぞ」
意識はあったプトティラが暴走しなかったのだ
「あれは、」
メタルがおびえる
「龍？大丈夫なのか？」
気のせいか冴子の目から涙が見えた
「ああ、大丈夫だ、さて今までの１０倍返しだ！」
メダガブリューを手に持ち４体の攻撃しようとしたが、
ナイフのようなもので逆に攻撃を受けた
「何？」
俺の前に黒いマントをはおった白い仮面ライダーがいた
「ほう、おまえがあの息子か？」
「だったら何だ！」
もう一度斬撃を加えようとしても避けられてしまった
「さあ、死神パーティーの始まりだ！」

無茶と永遠（後書き）

次回アクセルと5枚目

アクセルと5枚目

「さあ、死神パーティーの始まりだ！」
そう言うと向こうから攻撃を仕掛けてきた
攻撃は早く、今の俺じゃあとてもじゃないが勝てない
俺は、まともに攻撃を受け、飛ばされた

「これがエターナル、永遠の力」
エターナルがロストドライバーを触る
（なんだ、速い・・このままじゃ殺される）

その時、紫のメダルが光り体に電気が走る
「ぐっ、あ、がっ！」

「まだ、紫の力が使えてないのか？」

「くそ、不の感情でこいつが暴走するのか？」

「もう殺したほうがいいか」

「くそが・・・」

小室たちは、ベランダからすべて見ていた
「龍！頼む無茶しないでくれ」
冴子がうったえる

「ん？おい、上の奴らこの俺様が倒してこようか？」
メタルが上の冴子たちに気づいた

「ああ、言って来い」
エターナルが興味なさそうに答える
「やめろ！」
俺が立ち上がりメタルを攻撃しようとするが、行く前にエターナルに地面に伏せられた
「やばいどうしよう、下のみんなが逃げられない」
平野があわてる
「面倒だ、ここいら全部焼け野原にしてやる」
『ＺＯＮＥ　マキシマムドライブ』
一つのメモリをセットするとドーパントたちのメモリが抜かれどこからか２６個のメモリがエターナルの体にセットされた
『ＥＴＥＲＮＡＬ　マキシマムドライブ』
「終わりだ！」
「あ～あ、つまんね」
メタルが家に行くのをやめた
「ぐっ、さ　させねーよ！」
俺はエターナルに突進をし、セットされたメモリを数本抜き、Ｐのメモリを手で粉砕した
「ばかが！お前から死にたいか！」
エターナルのナイフが俺の体に刺さる
「がああああーーーーーー！！」

辺りに悲鳴が響く
変身が解けた
「さあ、もっと悲鳴をあげろ！はっはっは」
「・・・・・っ、こ、むろ、たかしぃ！」
「く、黒鬼さん」
「俺はもう死ぬが、こいつらぐらいは道連れに出来る、だから速く逃げろ」
「だめだ！龍！やめてくれ」
「どうすれば・・・いいんだ」

「僕は、いやです」
「小室？」
「もうこれ以上、だれも僕の目の前から死なせない」
その時、小室の手で何かが光り小室を包んだ
「なんなの？あのぼうや」
「わからないは、でもあれ」
「ライダーの光」

エターナルは確かにそうつぶやいた

光はそのまま下に降りてきて光の中から小室が出てきた、手にはアクセルドライバーが握られていた

「小室！受け取れ！」

俺は奪った中のアクセルメモリを小室に投げ、ナイフを抜き小室ところに走った

「しまった！」

「小室、使い方わかるよな」

「ええ、ばっちり」

「俺も奪ったばかりのメモリを使うかな」

「いくぜ！」

「はい！」

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＪＯＫＥＲ　ＡＣＣＥＬ』

「「変身！」」

俺はＷＣＪに小室はアクセルに変身した

「たかが一体増えただけでふざけるな！」

「殺す！」

「ど・お・か・ん」

「・・・・ゲーム・スタート」

「ひゃっは～踏み潰す」

『ＭＥＴＡＬ　ＨＥＡＴ　ＬＵＮＡ　ＴＲＩＧＧＥＲ』

向こうもドーパントに変身する

お互いにダッシュし俺はエターナル、ヒート、メタル、
小室はトリガー、ルナを相手する

「おら！」　「はっ！」
ヒートとメタルの攻撃を手で受け止めサイクロンの蹴り
をおみまいする
「今度は４倍返しだ」
「おもしろい」
「「はぁーーー」」

ガン、ガン、小室はトリガーに攻撃を当てられないでいた
「くそ！遠距離はきついな、」
ルナが間に入り攻撃を仕掛けるが、逆に攻撃をされる

「こんなプレイ嫌いじゃないわ」
ルナが手を伸ばし攻撃をする
「ぐっ、初心者に容赦ないな～」

その時、
「小室君、龍、準備が整った逃げるぞ」
冴子たちが車で迎えに来てくれた
「小室、今だったらいける、速く乗れ」
「はい！」

小室が変身を解き車に乗ったその時、
ガァン　と車と俺の間に黒い炎が降ってきた

「・・・誰だ、こんな楽しいパーティーを邪魔するのは」
エターナルが静かに言った

「悪いな、エターナルこっちも仕事なのでね」
それにいたのはリュウガだった

「久しぶりだな、黒鬼」
「くそ、何しにきた！」
「そうかっかするな、今日はお前にプレゼントだそうだ」

リュウガが俺に何か投げそれが体に入る

「ぐっ、こ、これは」
体がきしむ感じ、これは、
「そう、ご察しのとうり、紫のメダルだ」

再び、メダルを俺に入れる
「ぐっあああああああーーーーーー！！」

俺はWから変身が解かれ恐竜グリードに変わった
「ぐー、ぐー」

「この感じ、あいつと同じ」

「び、びびるこたあねぇ、いくぞ！」
ドーパント達が攻撃を仕掛けるが、

ガン、ガン、バン、バン
4体は人間体に戻りそのまま消えた、メモリは地面に落ちていた

「俺の仲間がてめーーーー！」

『ＥＴＥＲＮＡＬ　マキシマムドラ・・・ブ』

無残にもロストドライバーごと粉砕し、エターナルは

「こいつの・・・・は・・つ・・うん・・・・い・・か」

消えた

簡単にも変身は自動で解け、気絶した

リュウガはいなくなっていて、黒い炎も消えていた

「先輩、あれは？」

「私にもわからない、でもなんだか怖いな」

「で、黒鬼さんをどうするのよ」

暗い話題に耐えれなくなった高城が言った

「ほっておけないし、助けよう」

俺は車に運び込まれた、当の本人は知らない

アクセルと5枚目（後書き）

次回　誕生日と駒

誕生日と駒（前書き）

題名間違えました、すみません

誕生日と駒

ガン！という音とともに、俺の体は宙に浮いた
最悪なことに宙に浮いたときに俺は目を覚ました
「ん？・・・なん、～～っぐあっ！」

そして落ちた、背中を強打する

周りを見るとどうやら車の中らしい、運転席には鞠川先生が座っていた
「あ、お、起きたの？・・・黒鬼君」
「はぁ、ここは？・・・エターナルは！」
「おぼえてないの！・・・・そう、分かったは、」
鞠川先生は車から降りた、どうやら外にいたみんなに何か話している
俺はそのまま、車から降りた、河川敷の近くの道路にいた

「龍、よかった、無事か？」
冴子が笑顔で俺の胸に飛び込む
「さ、えこ？か・・・」
うれしいが何か素直に喜べなかった
俺は冴子を離した、見ると冴子の格好が変わっていた
他の女子も着替えたのか衣装が違う

「・・・先輩、」
「どうした？小室」

「・・・・あのっ」
「お前が倒したんだろ、全員」
「え？」
「さすが、小室だな、俺が刺されて気絶しているときにあんな人数を一人でさすがだな」
「・・・・・・はい」
「そんなに遠慮するな小室、俺が悲しいぞ」
その時、小室の足に犬がやってきた
「何だその犬」
「はい、ジークです、平野が名づけたんです、それと」
小室の手からガイアメモリが４本手渡された

「これは？」
「はい、こいつが持ってきたんです」
小室はジークをなでた
「・・・そういやぁ、俺が助けた女の子は？」
「平野と遊んでいます、彼女の名前はアリスで・・」

「黒鬼さん、あなた本当におぼえてないの？」
高城が俺たちの話にわって入り質問してきた
「？？？何のことだ、高城さん、俺が何もおぼえてない？」
その時、冴子と宮元が高城を抱え、そそくさと、車に乗った

「なぁ、小室おれって」
「あ、早く行かないと、先輩早く、早く」
小室は俺の背中を押し、俺を車の中に乗せた

車は小室から高城の家に行っていると聞いた、みんな何か隠している感じがした
不意に俺は、エターナルに開けられた傷を触ろうとした
「・・・・・・・・傷がない・・・」
その時、
「なに！私の家に近づくにつれて奴らが増えている」

「鞠川校医！右だ！」
「はいっ！」
車が大きく右に曲がるが、前の道路にワイヤーが張られていた

「ぶつかる！」
「こーたちゃん」
「大丈夫だよ、ありすちゃん」
「先生、ブレーキ！」
先生がブレーキを踏むが利かない
「先生、ハンドルを左に！」

先生は一瞬うろたえたが、ハンドルを左に切る
全員が止まることを祈った

ここは、戦艦、最大の黒幕の親父が束ねる組織
「いくら言っても納得がいかんな」
「ふ～さすがに意味がわからんか？」
親父とリュウガが話をしている、周りには誰もいない
「貴様はなぜ、あいつに自分の力を与えた」

「なぜかというと？」
「わざわざ自分の力を半分にしてまでなぜ力を与えたかと聞いている！」
リュウガの周りから威圧を感じる
「まだ私を殺せんぞ、・・・確かに私の力は落ちた、だが、息子の誕生日を自分のためにプレゼントを渡さないのは親としてどうだ？」
「プレゼント？」
リュウガが繰り返す
「そうだ、息子の誕生日を祝うことを忘れていたからな、その侘びだ」
「・・・・・・・・」
「納得いかんか？なら別の意味としたら、・・そう、私のコマをことごとく潰してくれたご褒美だ」
親父は手首を回す
「ＮＥＶＥＲは、結局・・・」
「ああ、コマだ、ただの捨てゴマだ」
リュウガの威圧が止まる
リュウガが背を向け、部屋を出ようとする
「俺も所詮捨てゴマか、だがいつかお前の喉元に噛み付く、覚悟しろ」
部屋を出る前にリュウガが言った
「ああ、噛み付くのは息子か、お前か・・・・楽しみだ」

誕生日と駒（後書き）

・・・・・お知らせ・・・・・

今回からいろいろ都合で次回予告は書きません

（今回のことがあったからです。）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0780v/

仮面ライダー×学園黙示録～仮面ライダーとひとつの世界～

2011年11月20日11時32分発行